

下肢の外傷疾患

北アルプス医療センターあづみ病院
整形外科医長

狩野 修治

第10回では足の小指の骨である第5中足骨の骨折の中でもJones骨折と下駄骨折とよばれる骨折について紹介させていただきます。

Jones骨折とは

1902年にJones医師が自ら経験した第5中足骨近位部（図のような足の第5趾の中足骨の踵側）の骨折を報告したことからJones骨折と呼ばれています。図のような足の第4・第5趾の中足骨間関節（2本の中側骨が接する部分）の遠位端に一致しておきる骨折です。転倒などにより骨折するよりも、スポーツなどによる反復する力でおこる疲労骨折として生じることが多いといわれています。

下駄骨折とは

図のような第5中足骨の結節部とよばれる近位端の剥離骨折のことを下駄骨折と呼ぶことがあります。結節部とはJones骨折の骨折部よりさらに踵よりの短腓骨筋腱が付着している部分で、下駄骨折とはこの短腓骨筋腱による剥離骨折のこととされます。下駄の鼻緒が切れた時に受傷することが多かつたことから下駄骨折といわれますが、これは俗称で、第5中足骨結節部剥離骨折と呼ぶことになります。

受傷機転

下駄骨折は前述のとおり下駄の鼻緒が切れ、足をひねる・転倒することで受傷することが多かったのですが、下駄をはかなくても転倒・足首の捻挫にともなって受傷します。短腓骨筋腱による剥離骨折であり、足首の内返しの強制と筋収縮により生じるとされます。

診断

下駄骨折と完全骨折にまで至ったJones骨折は単純X線写真で診断できます。しかし完全骨折に至っていないJones骨折は骨折線をはつきり認

Jones骨折はランニング・ジャンプ・ステップ・ターンなどの動作の繰り返しにより疲労骨折として受傷することが多いとされます。これらの動作により前述の第5中足骨近位部に応力が集中すると考えられています。スポーツ選手の疲労骨折としてよく知られ、特にサッカー選手に多いと報告がされています。

症状

下駄骨折は転倒・足を捻ったのちに足部外側の疼痛と自覚されます。捻挫など他の部位をいためた可能性もあるので足部外側だけがいたいとは考えにくいかかもしれません。

めないことがあるためMRIが早期診断に役立つとされます。

治療方法

下駄骨折は保存的に経過をみるとほとんどどの症例が骨癒合をえることができます。しかしJones骨折はギブスをまいて保存治療を行うだけでは骨癒合が得られないことが多く、一般的には手術による骨折部の固定がすすめられます。

